

# 東熊野苗畑遺跡

遺跡番号 628  
所在地 村山市大字本飯田字熊ノ山  
北緯・東経 38度31分40秒・140度23分3秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
調査原因 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）改築事業  
調査面積 2,250㎡  
現地調査 平成22年5月18日～11月30日  
調査担当者 齋藤 健（調査主任）・大場正善・川崎康永・濱松優介  
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所  
遺跡種別 集落跡  
時代 縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代  
遺構 竪穴状遺構・掘立柱建物跡・溝跡・柱穴・河川跡・土器集中部等  
遺物 縄文土器・石器・土師器・須恵器（文化財認定箱数：10箱）

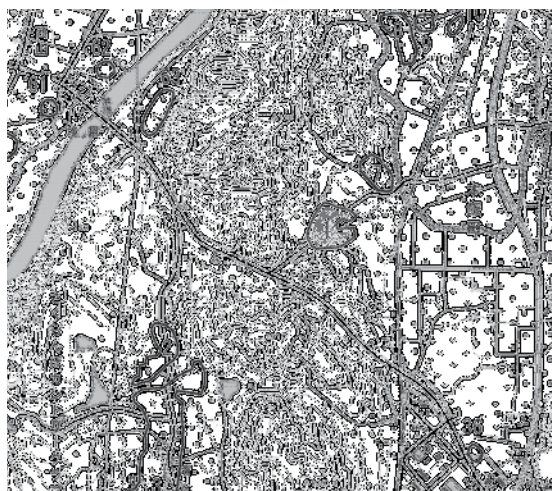


図1 遺跡位置図（1：25,000）

## 調査の概要

東熊野苗畑遺跡は、山形盆地と尾花沢盆地の境界、最上川三難所隼の瀬から約3km離れた本飯田字熊ノ山に位置する（図1）。地形的には、隼橋付近から南東に延びる谷筋の、さらにゆざ温泉の南約200mから東に分岐する浅い谷間（袖崎低地）に立地している（図2）。本遺跡では、縄文時代、古墳時代、および平安時代の遺構・遺物、そして埋没した最上川の支流が発見された。

今回、東北中央自動車道に係る発掘調査の一環として、本遺跡の約2,250㎡の範囲を対象とした発掘調査を行った（図3）。調査区は、北側の一段高いI区と、地形に沿っ



図2 調査区から西南方向を望む（谷地形がよくわかる）

て低くなっている南側のII区に便宜的に分けている。見つかった遺構は、I区でその東側に集中する竪穴状遺構、掘立柱建物跡、溝などで、II区では調査区の東西に走る河川跡、土師器片や須恵器片が密集して分布していた土器集中部などである。

なお、調査区では、I区の東側に戦前～戦後と思われる水田造成と、II区全体に昭和50～60年に行われた圃場整備によって、大きな土地改変が行われている。

## 遺構

### （1）I区

I区の東側では、竪穴状遺構（ST10）と掘立柱建物跡（SB25・SB67）、幅約30cmの浅い溝跡（SD4・SD5・71）が発見された。ST10は、南側の一部が近現代の水田





図5 ST10 竪穴状遺構（南から）

造成で壊されていたが、本来は、約4m四方の大きさであったと思われる（図5）。遺構の堆積土からは、9世紀ごろと思われる土師器の長胴甕や須恵器片が出土した。

SB67は、ST10に重複し、南側が風倒木と近現代の水田造成によって破壊されていた。SB25は、ST10よりも約2m西に離れており、2間×2間の正方形の形をしている（図6）。

SD5はST10とSB67を囲むように設けられ、その西側の途中で分岐するようにSD4がつながる（図5の奥）。とくに、SD5の底部からは、古代に噴火し、遺跡周辺に降灰したとみられる灰白色の火山灰が認められた。

## （2）Ⅱ区

**河川跡** Ⅱ区では、現地形の低地で、東西に走る河川跡が発見された（図3・4）。高低差から、西側が上流で、東側が下流になる。深さは、圃場整備で上部が削平されているものの、現存で0.6～2m程度あり、東に行くほど深くなる。河川跡の輪郭を平面上で検出した時点では、蛇行した4本程度の流路跡が、さらに河川跡を完掘した箇所底面では、いくつもの流路跡を確認することができた。また、部分的に掘り下げたA～Eトレンチの土層の断面観察からは、4本以上の流路跡が認められた。それぞれの流路では、流水していたことを示す砂礫層と、止水に近い状態、すなわち湿地状態であったことを示す黒色の粘土（泥）層が互層をなしている。

したがって、これらのことから、Ⅱ区で見つかった河川跡では、蛇行した流路が流水と湿地の状態を交互に繰り返していたこと。さらに、流路が埋没したのちに、ふたたび流路がわずかに流れの方向を変えて現れ、流水と



図6 SB10 掘立柱建物跡（南から）

埋没を繰り返していたことが判った。

河川跡の年代については、現在進めている理化学分析の結果次第であるが、出土遺物から判断すれば、少なくとも、縄文時代中期頃には流水していた可能性がある。そして、古代に降灰したと考えられる火山灰が堆積したあとは、1回程度の流水があったのち、埋没し、河川としての機能をほぼ失ってしまっていたことが判った。

現在では、すでに水が流れる流路を見ることはできない。しかし、谷地形の底部に沿って湿地が拡がり、近年に水田や溜池などが造成されていた。調査中も、湧水に悩まされ、また地山層の大部分が地下水が流れていることを示す、青灰色のグライ層を確認している。したがって、河川跡は、埋没したのちも、地下水脈として役割を果たしていたと言える。

河川跡からは、縄文土器、石器、古墳時代前期と思われる土師器、古代の土師器と須恵器、樹木、種子、昆虫化石が出土した。とくに、縄文土器や石器は、SG54よりも古い流路跡の底部付近の層序から出土した。そして、これらの遺物には、表面に磨滅した痕跡が認められる。調査区内に縄文時代の遺構は見られないので、これらの遺物は、調査区外の上流部にある縄文時代の遺構から流されてきたものと思われる。

河川跡から出土した樹木や種子などの自然遺物は、今後、土壌に残る花粉化石の分析を合わせて、当時の本遺跡周辺がどのような気候であったか、そしてどのような植物が生い茂っていたのかを明らかにする資料となる。

**土器集中部** 河川跡東端の北岸と、それに隣接する流路では、火山灰層の直下から300点以上の土師器片・須恵器片などの遺物が、約2.5m四方の範囲に集中して出

土した(図7)。

岸辺で遺物が出土した土層と火山灰層からは、流水を示す砂礫を認めることができない。また、土器片の表面には、農耕具などの引掻き傷が見られない。つまり、土器が出土した岸辺付近は、流水や、後世の土地改変の影響がなかったと言える。また、岸辺出土の土器片のほとんどは、内外面を岸辺平面と並行であった、すなわち自然な状態を保って出土した。したがって、岸辺付近の遺物は、火山灰降灰直前に散らばった当時の状態をほぼ保っていた、ということが言えよう。

そして流路跡から出土した遺物は、岸辺出土土器片が分布する範囲と南側に隣接するように分布していた。また、土器片を元の個体ごとに分別した結果、岸辺と流路跡で出土した土器片には、同一個体があることが判った。さらにそれぞれの個体同士同士の接合する

ことが多い。つまり泥層からの出土を考慮すれば、流路跡出土の土器片は、上流から流されてきたものでなく、流路が止水し、湿地であったときに分布したものであると考えられる。言い換えれば、岸辺と流路跡の遺物は、ほぼ同時期に分布したものであるとも言える。

土器片の分布状況は、個体ごとで一定のまとまりはあるものの、おおむね混在した状態である。土器の破断面同士を平面図上で線で表すと、一部分を除き、おおむね破断面同士が隣り合っているものが少なく、互いに離れ、接合線が複雑に入り組んでいることが判った。土器片には、打ち割った痕跡が見られるものもある。特に土師器は、煮炊きに使った痕跡を留めていた。これらの状況証拠から、土器集中部は、“他所でいくつかの土器を打ち割り、破片をまとめて、岸辺と湿地に数回に分けて廃棄した、という当時のヒトの行為が考えられる。

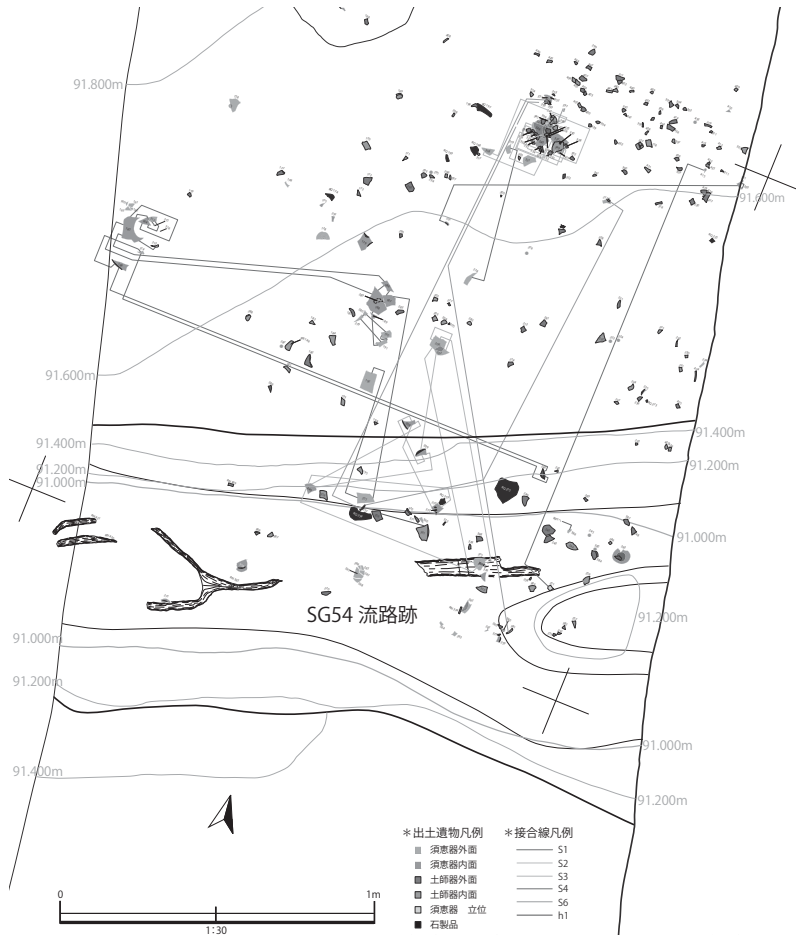


図7 土器集中部遺物出土状況と個体ごとの接合関係

### まとめ

東熊野苗畑遺跡では、最上川の支流とともに、流されてきた縄文時代の遺物や、その周辺に営まれていた古代のヒトびとの生活の一端を示す痕跡が認められた。また、河川跡に残された古環境にかんする試料の解析が進めば、村山盆地北部の当時の気候を加味した、過去の生活像の復原が可能になると考えている。

とくに、土器集中部は、火山灰の降灰直前に行われた、“廃棄行為の痕跡”である可能性が高い。なぜ、土器集中部が見つかった地点で、廃棄行為が行われたのかについては、今後の追究課題となるが、土器集中部の内容を解きほぐすことによって、過去の生活像を垣間見ることができる。本遺跡でそれができるのは、土器集中部が火山灰にパッキングされ、当時の状況を良好に保存していたおかげだ、と言えよう。